空手部で快汗

スペインの短期留学生　ルイスさん

オス！　エイッ！

「オス！」「エイッ！」。昼下がりの生田キャンパス第2体育館に威勢のいい掛け声が鳴り響いた。

秋期日本語・日本事情プログラム（9月20日～12月14日）を受講したスペインの短期留学生、ルイス・マニュエルさん（マドリード自治大学4年）は来日中、空手部の練習に参加。部員と汗を流し、交流した。

ルイスさんはスペイン北部サンタンデールの出身。地元の空手道場（指導・服部龍彦師範）に通っていた父上の影響で、16歳から服部師範の下でけいこを始め、日本語も教えられた。

マドリード自治大学ではスペイン語の言語学と文学を専攻。「日本語をもっと上手に」――専修大学への留学は昨夏の日本語・日本事情プログラム（7週間コース）に続いて2度目。昨夏、受講する際に、専大空手部（松濤會）と自分の流派が同じだと知った。「ぜひ専大でけいこを」という願いが実現。午前中の日本語授業のあと週3回1時間半ほどけいこに励んだ。

▲　貴島さん（右）を相手にけいこに励むルイスさん

得意の型は右足と左足で横蹴りする「二十四歩」。「専大道場で基本を勉強し直した。空手の本場でけいこできたのは幸せ」「空手を続けていると人と人との関係がうまくいく。精神力も強くなった」。空手の魅力を一層強く感じると話す。

「礼儀正しく探究心旺盛、教わったことは分かるまで何度も聞き返す。とにかく熱心ですよ」とは、練習相手で、食事もよく共にした貴島遼主将（法4）。

当のルイスさんは「日本語も空手もまだまだ」と控えめだが、空手は1級、日本語プログラムのクラスは最上級の「J5」。離日間際の12月9日の日本語プレゼンテーションでは、メキシコのノーベル賞詩人、オクタビオ・パスによる松尾芭蕉「奥の細道」の翻訳をテーマに発表した。「パスの独特な感性による芭蕉の世界を、ぜひ紹介したかった」。大学卒業後は大学院に進み、また日本を訪ねるのが夢だ。

貿易ゲームで留学生と交流

留学生と日本人学生の交流イベント「貿易ゲーム」が11月27日、生田キャンパスで開催された。大林守国際交流センター長がオブザーバーを務め、留学生15人、日本人学生28人の計43人が参加。白熱したゲームが展開された＝写真。

貿易ゲームは、貿易が世界の人々の暮らしにどのような影響を与えているかを知る参加型のワークショップ。当日は7グループに分かれて行われ、各グループをひとつの国に見立て、資源・資金・技術が異なるなか、それらを使ってどう製品を作り、販売し、利益を上げるかを競う。チーム内でアイデアを出し合い、ほかのチームから資源や技術を提供してもらうなど、会話や交渉が重要となる。

「資源が多すぎて油断した」「価格変動を予測できなかった」などの反省もあった一方、資源も資金も少ないのに利益を上げた国もあり、参加者は工夫次第で飛躍できることを実感したようだった。

司会の国際交流会SHIPの山ノ井優太さん（経済3）が「今回仲良くなった留学生、日本人学生と今後も交流を」と呼びかけ、終了した。

1月に留学生の壮行昼食会

2014年3月に卒業・修了を予定している留学生の門出を祝う「壮行昼食会」が開かれる。

▽日時＝1月16日（木）12時20分

▽場所＝生田キャンパス国際交流事務課・多目的会議室

※詳細は国際交流センターのホームページで。

鳳選抜展

書道研究会

書道研究会（小林優里代表・人間科学2）の作品展「鳳選抜展」が11月30日から12月12日まで、専修大学サテライトキャンパスで開催された＝写真。鳳祭で展示した58作品の中から顧問の仲川恭司文学部教授が選んだ20点と、同教授らの作品2点の計22点が市民に披露された。

小学1年から書道を続けてきたという小林代表は、仲川教授の指導を受けて字が変わったと話す。「紙いっぱいに力強く書けばいいと思っていましたが、余白を含めて芸術と教わり、余白を生かすことも考えるようになりました」

部員は70人ほど。題材を決めてから長い人は半年以上かけて書き上げ、表装とのバランスまで考慮された力作が並んだ。

顧問賞は加藤謙吾さん（商3）、同研究会のOB・OGから贈られる鳳眼会賞は竹内洋介さん（文3）、特別賞は丸野桃奈さん（商2）、新人賞は齋藤若菜さん（商1）が受賞した。

外国語のススメ　LL研究室

―●25●―

英語

語学力は〈構文力〉

小山　太一　商学部准教授

「日本の外国語教育って、文法ばっかじゃん？」「もっと実用的なコミュニケーション力を身につけたいのに」……そういう意見を、学生のみなさんからしばしば聞きます。

これは半分当たっていて、半分外れています。確かに、従来型の外国語教育は文法の細部にこだわりすぎたかもしれません。けれども、私が授業で実感するのは、「そんなヤワな文法力じゃ、コミュニケーションの〈発信〉も〈受信〉も怪しいぞ」ということなのです。

私の言う文法力とは、〈外国語マメ知識〉の集まりではありません。センテンスを組み立てる力、つまり〈構文力〉のことです。

〈発信〉つまりしゃべったり書いたりすることは、構文の力なしではできません。そして、ネイティブ・スピーカーでない我々にとって、〈受信〉とくにリスニングの際には、音を瞬時に文に変換し、文脈を読み取るための構文力が欠かせないのです。

では、構文力はどうすれば身につくのでしょうか。いちばん効果的なのは、身につけたい外国語の基本センテンス集を手に入れ、丸暗記することです。それも、繰り返し声に出して読み上げて、反射的に口から出て来るまで覚えこんでしまうことです。センテンスの数は500もあればいいかな。

えっ、そんなの面倒だ？　「実用的なコミュニケーション能力」を身につけたいみなさんが、何をおっしゃいますか！

※全文はLL研究室ホームページで

漫画研究同好会

首の後ろに触る

トゲマル（ネット情報1）

昼食のひと時をスウィング

＃ミニコンサートb

昼食のひと時を彩る「秋のミニコンサート」が11月11日、生田キャンパスで開催された＝写真。

今回は初めてスウィングジャズ研究会が登場し、「Take the A Train」「Infant Eyes」「The Heat's On」など全4曲を披露。16人編成のビッグバンドによる迫力ある演奏と、素晴らしいソロ演奏がアトリウムに響き、学生たちは演奏に聴き入っていた。

緑地帯

嫌いなものに向き合う

本稿執筆時は冬の入り口であり、今年も寒くなりそうな気配である。この紙面の発行された今、皆さんは今シーズンの寒さをどう評価しているだろうか。

筆者は元来、冬の寒さが苦手である。寒いよりは暑い方が好きである。「住まいは夏を旨とすべし」の木造家屋で長らく生活し、凍えてきたせいだろうか。いずれにせよ、長年、嫌いな寒さとどう向き合うかは懸案事項であった。

状況は変わらぬまま月日を重ねてきたが、ふとしたきっかけでスキー・スノーボードをすることとなった。それまでは嫌いな冬に追い打ちをかけられるかのようなウインタースポーツなど完全に守備範囲外の娯楽であった。ところが、いざ体験してみると、元来体を動かすことは好きな性分であり、これが想定外に楽しい。リフトの上では凍えそうだが、滑走中は暑いくらいである。これまで食わず嫌いであったことが悔やまれた。

このような経験を経て、嫌いだった冬の到来にも楽しみが見つかり、冬に対する「嫌悪感」は相当薄らいだ。嫌いな中にこそ、何か楽しみを見いだすことが一種の「人生の知恵」ではないかと今では考えている。

学生のみなさんもきっと嫌いなものがたくさんあることだろう。むしろ大人以上に好き嫌いが激しいようにさえ感じる。嫌いなものを好きになれ、と言うつもりはない。何でも良い。嫌いな中に何か楽しみ、好きになれるところを探してみてはどうだろうか。きっと日々の生活がもっと良くなるはずだ。

（学生部）